

---

# 魔法少女リリカルなのは ~白き光の魔導士~

ざわ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～白き光の魔導士～

### 【NZコード】

N5183M

### 【作者名】

ざわ

### 【あらすじ】

彼の幸せはあの一瞬で奪われた・・・

彼は襲撃の真実と犯人を見つけるため魔導士となつた。そして新暦75年。

物語は動き出す！！

## プロローグ（前書き）

はじめまして。ざわです。  
初小説なので間違えは  
いろいろあると思いますが  
よろしくお願いします。

## プロローグ

俺は14年前のあの日、大切な両親を失った。

14年前

第97管理外世界（地球）  
極東地区日本・海鳴市

「大地～早くしなさい  
なのはちゃんにお別れ言えなくなるわよ～！～」

「は～い」

俺はその日、海鳴市から  
ミッドチルダに引っ越そうとしていた。

地球では魔法なんてなかつたが、父さんが地球出身なのに魔力を持  
つていたので管理局の民間協力者として、事件などを解決したりし  
ていた。

そして正式に管理局員に

なるためにミッドに引っ越すことになった。

でもそれを一番嫌がつたのが、隣の喫茶店、“翠屋”の  
末っ子で俺の一つ下の幼馴染のなのはだつた。

ちなみになのは達は、魔法のことなんて知らない一般人なので海外  
に引っ越しと言つている。引っ越しのことを、伝えた時はなのはが  
泣き出してなだめるのがたいへんだった。

俺が翠屋に行くと入つて早々、なのはに抱き着かれた。

その時、恭也兄さんから

殺氣がでていたのは

気のせいだったと今でも

思いたい・・・・・

「また、会えるよね?」

なのはは涙声になりながら、俺に聞いてきた。

「うそ、会えるわ!」

「約束だよ?」

「約束だ」

そうして、俺はなのはと  
約束し、ミッドへ旅だった。  
そして、俺は・・・・・

新暦75年  
第1世界ミッドチルダ  
機動六課正面

ある男が機動六課の建物を見上げて驚きの声を上げていた。

「は〜立派な建物だな〜

「いや。」

『マスター 関心してる場合ではありませんよ。』

彼の首にかかっている紺色の丸い宝石のようなデバイスがそう注意した。

「まあ、そう言つたつてお前、ホントお固いな。」

『マスターがお気楽すぎるんですよ。』

「だいたい、固すぎると

“あいつ”や“妹”に会つた時に身が持たないだろ?』

『はあ、わかりましたよ。とにかく行きましょう。』

「ああ

こつじて彼の物語が動き始めた。

## プロローグ（後書き）

次話はオリキヤラ設定です。

## オリ主設定 (Strikers) (前書き)

今回は、IJの小説に出てくるオリキャラとバイクの設定です。

## オリ主設定(Strikers)

明日原 大地（大地・A・ハラオウン）

出身：第97管理外世界（地球）極東地区日本・海鳴市

所属：遺失物管理部機動六課「スターズ分隊」

役職／階級：

機動六課「スターズ分隊」補佐／三等空佐

魔法術式／魔導士ランク：

ミッド式、古代ベルカ式／空戦SS+（リミッター時 A）

魔力光：白

魔力変換資質：「光」

好きな物：甘い物、料理、掃除

苦手な物：苦い物、カビ、ダニ（といつか汚い物）

容姿

CLANNADの主人公の岡崎朋也の髪を少し短くし、目と髪を黒くした感じ。左頬に傷がある。

性格

普段は呑気でだれにでも優しい。

しかし、任務になると性格が一辺し、冷静である。

バリアジャケット

上はYシャツで下は長ズボン。Yシャツの上にコートを着ている。

全体を白で統一している。

細かい所はなのはのバリエジャケットに似ている。

なのはの1つ上の幼馴染でフェイトの義兄。魔法の存在は父親が魔導士だつたため、昔から知っていた。

地球からミッドチルダに引っ越す途中、謎の魔導士に襲撃され両親を亡くした。それからは、ミッドチルダにある孤児院で10歳まで過ごした。

そして、10歳の時にリンディ・ハラオウンに引き取られた。

引き取られた後、なのはが魔導士になつてることを知り、リンディに自分のことをなのは達に黙つてているようにお願いしていたため、なのはは大地がミッドにいることは知らなかつた。

機動六課に出向してきた理由は、リンディに推薦されたのと謎の魔導士について情報を得るため。

六課では、なのはが率いる「スターズ」の補佐をしていてなのは教導の手伝いを時々している。

しかし、いつもはもっぱら事務仕事をしている。

食べ物に関しては極度の甘い物好きで、あのリンディ茶を平然と飲む。

料理や掃除が好きなど家庭的な一面もある。（料理はプロ以上らしい・・・・・）

戦闘はなのはに似て砲撃や射撃を得意とする。

しかし、接近戦にも強くシグナムを圧倒するほど

得意技はディバインバスター。

デバイス

ヴェリアル・ハート

大地のデバイス。

レイジング・ハートと同型。ただしレイジング・ハートよりも強度が高い。

A.I.は女。レイジング・ハートみたいに無理をすることはほとんどない。

フレンドリーで高性能なデバイスなので、大地から離れいろんな人と話していることがある。そのせいか大地より知られている。待機時は紺色の丸い宝石で、なのはのレイジング・ハートみたいにネックレスになる。

アクセルモード  
バスターモード

この2つは基本的にレイジング・ハートのとほとんど変わらない。

セイバー モード

2つある接近戦用のモードの内の1つでスピードを重視している。  
双剣にもできる。

ナックルモード

もう一つの接近戦用で、大地のフルドライブ。攻撃に特化している。  
この時は、我流のシャイニングアーツを使う。  
バリア系やフィールド系などはこのモードには、ほとんど意味がない。

プラスティングモード

大地のリミットブレイク

このモードも基本的な所は、なのはのエクシードモードと変わらないが、こつちはブラスター・システムみたいなリミットが5つ付いており、大地はリミット3までなら使えるが、リミット4と5は使った後の反動が強すぎるるので封印してある。

## オリ主設定（*strikers*）（後書き）

まだ、小説を書き始めたばかりなので設定考えるのがたいへんでした。

## 再会（前書き）

すいません。

投稿が遅れました。

今回は原作 + オリジナル話です。

## 再会

30分ほど前

機動六課部隊長オフィス

漸くできた機動六課の隊舎。

その隊舎の中にある部隊長オフィスでは、茶色のショートカットの女性、八神はやてと彼女のユニゾンデバイスであるリインフォース（ツバアイ）が話していた。

「IJのお部屋もやつと隊長室らしくなったですね～。」

「ふふ、そやね。リインのデスクもちょっとビビッえのが見つかってよかつたな～。」

リインの身長は約30?。

普通の人よりも小さい、とか言つレベルではない。

実際、よくリインにあつデスクがあつたものである。

「えへへ。リインにピッタリサイズです～。」

リインは両手を上げてとても嬉しそうだつた。

その時、ヒ~~~~とブザーがなつた。

「はい。どうぞ～。」

『失礼します。』

はやてはやう促して入つてきたのは、

「あー、お着替え終了やな。」

「おー、人共素敵です。」

栗毛色の髪を左側にサイドポニーにした女性、高町なのはと金色の長い髪を腰の辺りで黒いリボンで結んだ女性、フェイト・T・ハラオウンだった。

「いやはははは。」

「ありがと。リイン。」

二人共、リインが褒めたことで、それぞれの反応をとつていた。

「三人でおんなじ制服姿は、中学校の時以来やね。なんや、懐かしい。」

「まあ、なのはちゃんは飛んだり跳ねたりしやすい、教導隊制服でいる時間のほうが多くなるやろうけど・・・。」

「まあ、事務仕事とか公式の場ではこいつちつてことだ。」

微笑むはやてとリインだった。

「さて、それでは。」

「うん。」

そこでのなはとフェイトは改めて、姿勢を正し敬礼した。

「本日、只今よつ、高町なのは一等空尉。」

「フェイド・T・ハラオウン執務官。」

「両名共、機動六課に出向となります。」

「どうぞ、よろしくお願ひします。」

「はい。よろしくお願ひします。」

それが終わると三人共、笑い出す。

「やういえば……」

はやてが何かを言おうとした時、再びブザーがなった。

「どうぞ。」

入ってきたのは、薄紫色の髪に眼鏡かけて機動六課の制服を着た青年だった。

「失礼します……あつ」

その青年はなのはとフェイドがいるのに気が付いた。

「高町一等空尉、テスター・ラ・ハラオウン執務官、ご無沙汰しています。」

そつ言われた、なのはとフェイドは青年が誰なのか一瞬分からなかつた。

「え～と……」

「もしかして、グリフィス君？」

「はい。グリフィス・ロウランです。」

「わあ、久しぶり～っていうか、す～る～い、す～る～い成長してね～。」

「うん。前見た時はこんなちやかかったのに。」

なのはとハイトはグリフィスの成長の速さに驚いていた。

「そ、その説は、いろいろお世話をになりました。」

「グリフィスも」の部隊員なの？」

「はい。」

「私の副官で、後退部隊の責任者や。」

「運営関係もいろいろ手伝ってくれてるやつ。」

グリフィスが来てからなのは達とグリフィスのやり取りを見ていたはやてトリインが、説明した。

「お母さん、レティ提督はお元気？」

「はい。おかげまで……あつー、報告をしておきしこでしうか。」

グリフィスは言おうとして忘れていた報告のことを告げる。

ג' ניר עלי

「FW四名をはじめ、機動六課部隊員とスタッフ、全員揃いました。今は、ロビーに集合、待機させています。」

「やつか。けつこう早かつたな。せんなりなのはひやん、フハイトひやん。まずは部隊のみんなに挨拶や。」

うん

その頃、大地は・・・・・

「うーん、どうだ？」

『なんで、内部の道のりを把握してないんですか！』

「いや、大丈夫かなあと思つて・・・・・」

『どれだけ準備してないんですか！』

「人に聞こうと思つても人いないしなあ・・・・・・・・」

おもいつきり、道に迷っていた。

### 機動六課隊舎ロビー

そこでは機動六課の部隊長、八神はやての挨拶がちょうど行われようとしていた。

「機動六課、課長。そしてこの本部隊舎の総部隊長、八神はやてです。」

そこで隊員やスタッフ達から拍手がおこる。

「平和と法の守護者、時空管理局の部隊として事件に立ち向かい、人々を守つて行くことが私達の使命であり、なすべきことです・・・」

と、このような話が続き、隊長陣も紹介されていき、最後ははやての言葉で締めくくられた。

解散になつた後、なのははFWの四人を集めた。

「これから行く所があるからついて来て。」

なのはがFW四人を連れて訓練場に行こうとしたところ、

「あつ、なのははちゃん。ちよつと待つてくれへん?  
話とかないかんことがあるから。」

はやてに呼び止められた。

「話つて?」  
話ハタチ

「実は、なのははちゃんが隊長をする『スターズ』には、補佐の人があるんよ。」

「えつー!？」

なのはは驚いた。

それもそのはずだ。

そんな話は、全く聞いてないからだ。

「でも、さつきの挨拶には、その人いなかつたよね?」

「それが遅れどるみたいで……」

はやては、困つたように言った。

「といひでどんな人なの?」

なのはは気になつたので聞いてみた。

「前はリンディさんの補佐をしたらしいんや。」

「母さん……リンディ提督の?」

はやての言葉に近くにいたフェイトが反応した。

「それで優秀だからつてリンティさんが機動六課に推薦してきたんや。あつ・・・それとなのはちやんのことよく知ってるからつて言つとつたなあ・・・」

「私をよく知つてる人？」

なのはをよく知つてる人はフェイトやはやて達以外はほとんどない。

「（そんな人、いたかな？）」

そう考へていると

ロビーに背の高い男性が入つてきた。

「あちやー。間に合わなかつたか。」

『マスターがちゃんとしたしないからですよ・・』

入つてきてからの言葉がこれだつた。

そこにいた隊長陣とFW陣は啞然としていた。  
ただなのはだけが混乱していた。

「大地・・・君？」

ロビーに入つてきたのが、14年前に海鳴市から海外に引っ越した  
はずの幼馴染、明日原 大地だったからだ。

「よ、久しぶりだな。なのは。」

なのはSide

私は一瞬、目を疑つた。

そこに14年間、何の連絡も無く、もう会えないのかと思つて  
いた幼馴染がいたから

「よ、久しぶりだな。なのは。」

昔より伸びた身長。

少し低くなつた声。

でも変わつてない性格と口調と雰囲気。

私は大地君になんて声をかけていいのか分からなかつた。  
すると大地君が私に近づいてきてこう言つた。

「あの時の約束、ちゃんと守つたぞ。」

その言葉を聞いて私の目からは、闇を切つたように涙が溢れだした。

俺の言葉を聞いた後、なのはは急に泣き出しあまけに抱き着いてきた。

大地Side

「ちよ、なのは。これはマズイつて！！」

「うえええええん！！」

本人は泣いて全く聞いてないし、近くに男性局員やスタッフ達からは、それだけで人が殺せるのでは？と思ふくらいの殺氣がでていた。しかも胸板になのはの胸がおもいっきり押し付けられていて、今にも理性が崩壊しそうだった。

フェイトはオロオロしてるし、ハ神は目が不気味に光ってるし、新人達なんてポカーンとしていた。

「とにかく落ち着け！！なのは。」

俺はなのはを一旦引き離し落ち着かせた。

「ぐす・・・・・うん・・・・

「とにかくー部隊長。」

「は、はい？」

「後の話は部隊長室でやりますよう。」

「わかった。」

「ところで新人達はどうするんですか？」

「そやな・・・此処で待機してもらひとこうか。」

新人達にそのことを伝え、俺となのは達、隊長陣は部隊長室に向かつた。

「といふでなんで遅れたん?」

「道に迷いました・・・・・・」

『・・・・・』

再会（後書き）

まだ慣れてないので疲れました。

## 自己紹介（前書き）

今回はオリジナル話です。

最近、小説に集中したいのに学校のことがあって集中できません。

ああ～小説に集中したい！！

## 自己紹介

機動六課

隊長長室

部隊長室にはなのは達、隊長陣と大地のほかにメカニックテサイナーのシャーリーが来ていた。ちなみにシャマルとザーフィラは用事があるとのことで来てなかつた。

「じゃあ早速、自己紹介して貰おか。」

「わかりました。俺の名前は、明日原 大地です。  
階級は二等空佐。

前はリンディ総務統括官の補佐をやつていて、主に事務関係を任せていました。

魔法術式はミッド式と古代ベルカ式の一いつ。  
魔導士ランクは・・・・・Aランクです。」

「なんやの今の間は!?

はやはおもわづシシ「ノミ」をいれてしまつた。

「ナ、ナンデモナイデスヨ~」

「わかりやす!..」

大地はおもいつきり片言になってしまつていた。

「とにかく隠してないで話してよ。」

なのはが大地に言つ。

「・・・・・・・・・・・・」

無言の大地。

「ダメ?」

そんな大地になのはは上目使いでお願いした。

「わかりました・・・」

大地、敢え無く撃沈。

仕方なく本当のことを見つた。

「本当はSASH + です。」

「ええええええええ！」

そこにいた全員が驚いた。  
シグナムはこれを聞くと

「よし、明日原、今から模擬戦をやろ!」

わざわざ、バトルマニアの血が騒ぎ初めていた。

「絶対、いやです！！」

大地はこの申し入れを即座に却下した。

「何故だ！？」

「いやと言つたら、いやなんです！…  
だいたい、こうこうになるとなるから言つのはいやだつたんですよ…。」

大地は、はやて達におもいつきり愚痴つた。

「ははは、すまんかつたなあ。」

「謝る暇があつたらなんとかして、シグナム一等空尉を説得していく  
ださいよ！！」

その後、はやてが説得するとシグナムはすぐにおさまつた。

「はあ、疲れた…。」

「す、すまなかつた。」

シグナムははやてに説得された後、反省していた。

「もう、いいですよ。」

その時、なのはは氣になつたことがあつたので、大地に質問した。

「ねえ、大地君。」

「なんだ？　なのは。」

「大地君は、古代ベルカ式も使えるんだよね？」

「そうだけど、それがどうかしたか？」

「古代ベルカ式が使えるってことは大地君の戦い方って、シグナムさんやヴィータちゃんと同じなの？」

「確かに接近戦もできるが俺の基本的な戦い方はなのはと同じ射撃や砲撃だ。」

「そうなんだ。」

「だいたい、デバイスが似ているから当たり前だろ。」

そう言つて、ポケットから取り出されたのはなのはのデバイス、レイジング・ハートと外見がほとんど一緒のデバイスだった。唯一、違うのはレイジング・ハートとは対照的な色のコアだけだった。そこにいただれもが一瞬、レイジング・ハートと見間違えた。

「こいつは俺のデバイス、ヴェリアル・ハート。」

所々、違う所もあるが基本的な所はほとんどレイジング・ハートと一緒にだ。

あつ、ただし性格は違うからな。

俺に文句言つ所とか。」

《皆さん、よろしくお願ひします。

つていうか、マスター、途中までよかつたのに、最後の説明がおかしかったですよね。

私は文句なんかいいません。》

「いや、すでに言つてるじゃん。」

『言つてません！』

「言つてる。」

『言つてません！』

こんなやり取りが5分間続き、最後ははやてに両方共怒られ、やり取りは終了した。

「まあ、とにかくこれからよろしくお願ひします。」

「はい。よろしく。  
ところで、大地君。」

「なんですか？ハ神部隊長。」

「その堅苦しい喋り方、やめてくれへん？なのはちやんに喋る時みたいでいいから。」

「マジで！？ よかつた  
この喋り方してると疲れるんだよな。」

周りは、大地の変わりよつに啞然としていた。

「あつ！… セツセツ忘れてた。」

そう言いながら大地は持っていた紙袋をはやてに渡した。

「これは？」

「爆弾。」

『ええええ！――！』

「嘘。」

「嘘かい！――！」

大地がボケて、はやてがツツこむ。

この何十分かで大地とはやはては息ピッタリだつた。  
この時、なのはからビズ黒いオーラが出始めた。

「大地君。結局、その紙袋の中はなんなの？」

なのはの声を聞いたはやての顔は青ざめていた。

周りのフェイト達も巻き込まれないようになっていた。

「何、怒つてんだよ。

せつかくの綺麗な顔が台なしだぞ？」

「さ、綺麗！？」

その言葉を聞いたなのはの顔は一瞬で熟れたトマトみたいに真っ赤になつた。

「後、この紙袋の中に入つてるのは、俺特製のクッキーだ。」

「え、クッキー？」

大地、お菓子作れるの？」

フェイトが大地に聞いた。

「お菓子もだけど料理ならなんでもできるぞ？」

「大地君の料理、すごく美味しいんだよ！…！」

いつの間にか復活したなのはが言つた。

その言葉にはやての中で大地への対抗心が燃え上がった。

「そういうことなら、今度大地君と私で料理対決しいひんか？」

「いいぜ。

受けて立つてやる。」

ということで大地とはやての料理対決が決まった。

「はやて。」

「なんや、ヴィータ。」

「話がズれてきてない？」

「あつ・・・・・」

ヴィータの指摘通り、最初の自己紹介から料理対決へとズレていた。

「とにかくこれからよろしくな。大地君。」

「ああ、よろしく。」

これで大地の自己紹介は終わった。

「そういえば、なのは。」

「何？」

「新人達、待たせてるけどいいのか？」

なのはは待たせている新人達のことをすっかり忘れていた。

「あ、いけない！」

大地君も補佐なんだからついて来て！！」

「わかった。」

なのはと大地は部隊長室を出ていった。

その後、

はやてが「勝てへん。」と呻きながら部隊長室で突つ伏していたの

は、  
また別の話。

## 自己紹介（後書き）

前書きでなんか変なこと書いてしまってすいません。

## 初訓練（前書き）

投稿遅れました。すいませんm(ーー)m

今日は二話の初訓練の話です。

## 初訓練

なのはと大地はFWの四人に急いで合流した。はやてとフェイトは機動六課の立ち上げ理由の一つになつたレリックの説明のため本局に行つていて別行動だつた。

「ごめんね、ずいぶん待たせちゃつたみたいで」

なのはは待たせたことを謝つた。

「い、いえどんでもない、大丈夫です……ところでそちらの方は？」

ティアナはなのはの後ろにいた大地に気づいた。

「あっ、さつきいなかつたしわかんないよね。

この人は機動六課で私の部隊、スターズの補佐をしてくれる……」

「明日原大地二等空佐だ。よろしく、四人共」

大地はなのはの言葉を途中で引き取り、簡単な自己紹介をした。

「スバル・ナカジマ二等陸士です」

「ティアナ・ランスター二等陸士です」

「エリオ・モンティアル二等陸士です」

「キ、キャロ・ル・ルシエ二等陸士です」

四人も大地に挨拶した。

「おいおい。そんなに固くななくていいって。呼び方も自分達で好きにしていいぞ。」

大地はガチガチの四人にそう言った。  
それを聞いて四人の固さは抜けた。

「そういうえば、お互いの自己紹介はもう済んだ?」

なのはが振り向き、四人に聞いた。

「え、えっと……」

「名前と経験やスキルの確認はしました。」

「後、部隊分けと「ールサインもです。」

スバルは急な質問にすぐには答えられず、ティアナとエリオが冷静に答えた。

「そつ、じゃあ訓練に入りたいんだけどいいかな?」

なのはは四人に聞いた。

『はい！』

四人からは元気な返事が返ってきた。  
ただし、一人は

「（はあ～今からかよ・・・）」

内心でめっちゃ嫌がつていた。

## 訓練場

なのはと大地はスバル達を待つていた。

「なあ、なのは。」

大地は気になつたことがあつた。

「何？」

「訓練場はどこだ？」

大地達の前にあるのは、海の上にある巨大な鉄のプレートだけだつた。

「あれだよ。」

なのはが指差したのは田の前にある巨大な鉄のプレートだった。

「いや、あれただの鉄のプレートじゃないか？」

「見ておけばわかるよ。」

「そんな」と言われたので大地は黙つてみていたことにした。

「なのはさん、大地さん」

「シャーリー」

さつき部隊長室で別れた、シャーリーがこちらへ走つてきた。  
少しすると反対側から四人もきた。

シャーリーはなのはが説明する前に事前に預かっていたデバイスを  
四人に返した。

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入つてゐるからち  
ょつとだけ大切に扱つてね。」

それとメカニックのシャーリーから一言

「え、メカニックデザイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フィ  
ーノ一等陸士です。」

みんなはシャーリーって呼ぶのでよかつたらそう呼んでね。

みんなのデバイスを改良したり、調整したりするのときどき訓練  
を見せてもらつたりします。

あつ、デバイスについての相談とかあつたら遠慮なく言つてね」

『はい！…』

シャーリーの紹介が終わると、

「じゃあ、やつそく訓練に入らつか?」

なのはがそう言つた。

「は、はい」

「でも、じいじですか?」

スバルとティアナは疑問に思つていた。

「ふふ、シャーリー」

「は～い」

そつ言つとシャーリーは端末を展開して何かの用意を始めた。

「機動六課自慢の訓練スペース。

なのはさん完全監修の陸戦用空間ショミレーター。  
ステージセット」

すると目の前の巨大な鉄のプレートから町が浮かび上がってきた。

「わあ～」

「あああ

「ああ

「す、じ、い・・・」

四人はそれぞれ、目の前の光景に驚いていた。

「へえ、これ、なのはが監修したのか。  
すごいな・・・・・」

大地も大地でこの技術に関心していた。

【よしつと、みんな聞こえる?】

『はい！』

なのはと大地とシャーリーはビルの上から四人を見ていた。

「じゃあ、さつそくターゲットを出してこいつか。  
まずは軽く八体から」

「動作レベルC、攻撃制度Dってどこですかね」

そう言つて端末を操作した。

「うん」

【私達の仕事は捜索指定ロストロギアの保守管理。

その目的のために私達が戦うことになる相手はこれ……】

すると四人の目の前に魔法陣が現れ、そこから八体の縦長いロボットが現れた。

「ガジェットか……』

大地が眩いた。

【そうです。自立行動型の魔導機械。

これは近づくと攻撃してくるタイプね。

攻撃はけっこう鋭いよ～】

【では、第一回模擬戦訓練、ミッション目的逃走するターゲット八体を破壊または捕獲、15分以内】

『はい……』

『それでは……』

『ミッション……』

【スタート……】

こうして四人の初めての訓練が始まった。

「なにこれ！　動きはやつ……」

「ダメだ。ふわふわ避けられて当たらない……」

新人四人は魔導機械に苦戦を強いられていた。

「苦戦してるな……」

ビルの上からみていた大地が言った。

「そうだね。あっ、そうだ……！」

なのはが何かを思い付いた。

「大地君の実力を見てみたいから、後で戦つてみて

「はあ！？」

大地は思つてもみなかつたことを言われ驚いた。

「どうしてもやらなきゃいけないのか？」

大地はなのはに聞いた。

「うん」

「拒否権は？」

「ないよ？」

「あ・・・わかったよ」

結局、やることになった。

丁度同じ頃、ティアナが撃つた魔力弾がガジェットに当たる前に消されていた。

「バリア！？」

「違います。フィールド系！！」

「魔力が消された！？」

四人は魔力が消されたことに驚いていた。

【そう、ガジェット・ドローンにはちょっと厄介な性質があるの。  
攻撃魔力を焼き消す・・・】

【アンチマギリングフィールド。  
通称AMFだ】

なのはの言葉を遮り、大地が続きを言った。

【大地君！！ それ私が言うこと！…】

大地が自分が言つことを言つたのでなのはが頬を膨らましながら怒つた。

しかし大地は

「（全く、可愛い奴だ）」

としか思つてなかつた。

【まあ、いいじゃん。  
とにかく説明してやれよ。】

大地はなのはに言つた。

【全くもつー！】めんね。説明途中に。  
ちなみに普通の射撃は通用しないし・・・】

「あつ！… くそぅ！ このあ！…！」

なのはが言つてる途中でスバルがビルの上に逃げたガジェットを追うために、ビルの上までウイングロードをひいた。

「スバル！！ 馬鹿、危ない！…」

そんな言葉を無視してスバルは進んで行く。

「それに、AMFを全開にされると・・・」

シャーリーがガジェットのAMFを全開をせるとスバルのウイングロードが不安定になつて

「きやあああああーー！」

スバルはウイングロードから落ち、ビルに突っ込んだ。

【気象や足場作り、移動系魔法の発動も困難になる】

「まず説明する前にスバルの心配してやれよ・・・」

冷静に説明しているなのはに大地がツッコンだ。

【スバル、大丈夫か？】

「いっつう・・な、なんとか・・」

【まあ、訓練場ではみんなのデバイスにちょっと工夫をして擬似的に再現してるだけなんだけどね。

でも、現物からデータをとつてるし、かなり本物に近いよー】

【対抗する方法は幾つかあるよ。

どうすればいいか素早く考えて、素早く動いて！】

なのはは四人にそうアドバイスした。

そのあと、ティアナを中心にガジェットに反撃し始めた。

「へえ～みんなよく走りますね～」

「危なつかしくてドキドキだけどね～」

「最初はそんなもんだろ 誰だつて」

なのは達はそうんことを話していた。

「デバイスのデータは採れそう?」

なのはがシャーリーに聞いた。

「いいのが採れそうですよ～。

四機共良い子に仕上げますよ～。

レイジング・ハートさんも協力お願ひしますね」

『了解しました』

その頃、新人四人は作戦を立て、ガジェットを倒そうとしていた。エリオは前方から向かってくるガジェットを止めるため、

「いくよ、ストラーダ。カートリッチロードー！」

ストラーダのカートリッチを一発ロードさせて、足元にある橋を破壊した。

その橋の瓦礫を避けて、ガジェットが上空に上がった所を今度はスバルが魔力を込めた拳で殴り付けた。

しかしAMFで魔力が消されて、いつもの威力は出てなかつた。  
「イマイチ威力が出ないなあ、それなら……」

スバルは後ろに行たガジェットにまたがり、

「つりやあああ！……」

リボルバーナックルをガジェットにのめり込ませて破壊した。

「よし……」

「連続行きます。フリード、ブラストフレア……ファイア！……！」

そう言つとフリードから炎が放たれ、ガジェットの近くに着弾してガジェット達がショートして動きが止まつた。  
それを見て、キャロも永唱を唱え始めた。

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。  
言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖・・・鍊鉄召喚、アルケミックチャー  
ン！……」

すると魔法陣から三本の鎖が現れて、三体のガジェットを捕らえた。  
シャーリーはこれを見て関心していた。

「へへ召喚ってあんなこともできるんですね」

大地も声には出してないが

「（無機物の召喚か。俺は初めて見たな）」

内心では驚いていた。

「「J」つちだつて射撃型。

無効化されてしまふかって下がつてたんじゃ生き残れないのよー！」

【スバル、あたしが上から仕留めるからそのまま追つてーー】

【おうーー】

ティアナはスバルにそう指示を出し、自分は魔力弾を膜状バリアにくるみ始めた。

これを見ていたシャーリーは驚いた。

「魔力弾！？AMFがあるのに？」

『いいえ、通用する方法があります』

レイジング・ハートがシャーリーの感想に答えた。

「うん・・・フィールド系の防御を突き抜ける多重弾殲射撃。AAランクのスキルなんだけどね・・・」

「ああ・・・」

「AAランク！？」

シャーリーはまたもや驚いていた。

「固まれ・・・・・・・・・・・・・・」

ティアナは外殻を固めるのを全神経を使って必死にやつていた。

漸く外殻が固まつたようでティアナは引き金を引いた。

「アリアフルシード」

オレンジ色の魔力弾がガジェットをAMF<sup>+</sup>と貫いて残っていたガジェットを全機、破壊した。

元イアカは疲れて倒れ込んでいた。

【ティア、ナイスだよ！やつたね、流石！！】

「スバル……うつさい……」のくらい……当然よ……」

この後、15分間の休憩が取られた。

その休憩の間に大地がやることになった。

# 【大地君、準備はいい?】

「いや、待て。ヴェリアル・ハート セットアップ」

### 『Stand by ready Set up』

大地がセットアップすると大地がまばゆい光に包まれた。光が収まるとそこにいたのは、全身を白で統一したバリアジャケツトを着ている大地だつた。

「き、綺麗・・・」

キヤロがおもわず呟いた。

「じゃあ、準備ができたみたいだから始めるよ。  
シャーリー、数は30体動作レベルS、攻撃制度Aでお願い。  
みんな、明日原三佐の動きをしつかり見ておくんだよ」

『はい！』

なのははスバル達にそう言つた。  
しかし、その会話を聞いていた大地が言つた。

【いや。別に俺、動かないけど?】

【えつ！？ どういふこと？】

なのはは理由を聞こうとしたがすでにその時には始まっていた。

「ヴェリアル。ターゲットは何メートル範囲にいる?」

『えつと、全機、400メートル範囲にいます。』

「わかった。ヴェリアル、アクセルモード!…」

『アクセルモード』

そう言つとヴェリアル・ハートの形が変わつた。

「さてと、やりますか。  
アクセルレイン…」

『アクセルレイン』

すると大地の遙か頭上に数百発の魔力弾が現れた。

「ダウン…・・・

大地がそう言つと魔力弾の雨が大地の周りに降り注いだ。白い砲撃として目の前の建物を次々と飲み込んでいった。魔力弾の雨が止むとそこに広がっていたのは大地の周りを取り囲むように広がつたビルの瓦礫とガジェットの残骸が転がつた土地だつた。

「なんですか・・・あれ・・・」

そこで大地の様子を見ていたティアナが呟いた。  
なのは達も大地の攻撃を見て目を疑つた。

本当にリミッターがついているのかと・・・

大地達の様子を訓練スペースから離れた所から見ていたシグナムと  
ヴィータはそれぞれの反応を取つていた。

ヴィータはリミッター付きにも関わらずあれだけの威力の技を出せ  
ることに戦慄を覚えていた。

一方、シグナムはと言つと・・・

「（やはり、戦つてみたい！）」

再び、バトルマニアの血が疼きはじめていた。



初訓練（後書き）

夏休みが全くないっす（：ー：）

## 炎と光と嫉妬（前書き）

初訓練の一部の文が一度繰り返されていたのは修正しておきました。  
とにかくおはすかしい限りです。

今回は、戦闘シーンとなのはの嫉妬、再びです。

戦闘シーンは苦手です。すこく短いです。

## 炎と光と嫉妬

大地はあの後、隊舎に戻ろうとした時に再びシグナムに試合を申し込まれどもしてもやりたいというシグナムの願いに負けてはやてに許可を取り、シグナムと試合することになった。

「はあ～」

大地はせつからため息ばかりついていた。

『マスター。ため息ばかりついてたら、幸せが逃げちゃいますよ』

「逃げやしねえよ。大体、幸せを味わえるのは甘いものを食べる時だ！！」

大地は甘いものに関して力説し始めた。

『・・・・・』

しかし、長い間彼のデバイスとして彼を見てきたヴェリアル・ハートは幸せと聞いたときに彼の瞳に一瞬映った悲しみの色を見のがさなかつた。

【大地君、そもそも始めていいかな?】

上で審判をしているなのはから念話が入ってきた。

「ああ、ゴメンゴメン。始めていいぞ」

「それじゃあ・・・・・スタート! ! !」

なのはの合図で大地とシグナムの模擬戦が始まった。

最初に攻撃を仕掛けたのはシグナムだった。

愛剣のレヴァンティンを抜き、大地に切り掛けた。

「はあああああーーー！」

「うおつとーーー！」

大地はそれを屈んで避けて、

「ヴェリアル、セイバー モードだ」

『セイバー モード』

射撃主体のアクセルモードから接近主体のセイバー モードに変えてシグナムの次の一撃に備えた。

「ほお、それが明日原の接近戦のモードか

「そうだな。あなたがいくら接近主体と言つてもやる以上は負ける気はさらさらない」

「望むところだ！！」

両者は真正面からぶつかり合つた。

「はあ……」

「くつ

だがシグナムが大地に押されていた。

その戦いの様子をなのは達は遠くから見ていた。

「おいおい、シグナムが押されてるじゃんか。  
あいつ、なのはと同じタイプじゃないのかよ……」

ヴィータはシグナムと大地の模擬戦を見ながらそうもらした。

「これがシグナム副隊長と大地補佐の戦い……」

「すうい……」

スバル達は目の前で繰り広げられる戦いのレベルの高さに驚きながら見ていた。

大地に押されていたシグナムは状況を逆転させるためにカートリッジをロードさせると刀身が炎を纏つた、大地もそれに合わせてカートリッジを一発ロードさせた。すると刀身がまばゆい光を放ちはじめた。

「なんだ？それは。お前の魔力変換資質なのか？」

シグナムは自分を圧倒するほどの大地の剣技の高さにも驚いていたがこれにはさらに驚いていた。

「ああ、俺だけが持っている魔力変換資質“光”。人に見せるのはシグナム達が初めてだ」

「それはうれしいな。だが負けん！！」

「勝つのは俺だ！！」

やり取りが終わると両者は一気に近づき

「紫電、一閃！！」

「光牙、一閃！！」

互いの技を放った。

なのは達は大地の剣が光出したことに驚いていた。

「なんだあれは！？」

「魔力の変換かな？でもあんな魔力変換資質なんて聞いたことない  
し・・・・・・」

そういうしている内に、シグナムと大地の技がぶつかり合った。一瞬、均衡したが大地の光牙一閃がシグナムの紫電一閃を焼き消し、シグナムに当たった。

シグナムは攻撃が当たり氣絶して地面に落ちそうになつたが大地がシグナムが落ちる前に受け止めた・・・・・・が、その受け止め方が問題だった。

膝の下に左手を廻し身体を右手で支える、世に言うお姫様抱っこ状態だつた。シグナムには何とも似合わそな体勢である。大地からすればただシグナムを受け止めたらこんなふうになつたのだろうがそれを見たなのはからはまたもやどす黒いオーラがでていた。

周りにいた大地の力について大地に聞こうとしていたスバル達四人は顔を真っ青にしてなのはから離れた。

シグナムの体勢を見て笑っていたヴィータやシャーリーもなのはから離れて大地に合掌していた。

「大地君。お話ししようか？」

大地はシグナム医務室に運ぼうとしてなのはに声をかけられて振り返り、顔がスバル達同様、真っ青になつた。

「い、一体何を怒つていらっしゃるのドショウつか？ せつかぐの顔が台なしですよ？」

「そんな」と言つたつて無駄だよ？せ、逝こいつか？」

「字が違うからー！」

大地の口説きが効かず、大地はなのはに訓練場に引きずられて行つた。

その後、訓練場から大地の叫び声が聞こえていた。

## 炎と光と嫉妬（後書き）

言ひ忘れてましたが遅くなつてすいません。  
あと、設定は物語が進むと少しひこ増やします。

一万アクセス突破！ 作者の扱いは酷かつた～

大地「うるさい！！」

さわ「ぐべへー!?

はやて「まあまあ、漸くこの駄目小説のアクセスが一万いつたんやから

さわ「今、さらりと馴目小説、いいましたよね！？」

はやて「氣にしたら負けやでーー」

ざわづいや、気にしますって！  
かしてるんだから。  
ただでさえいひんな間違いやら

初訓練の時とかを同じ文を編集//スで・・・ツツツ

「ナイト、せめて、あんまり攻めぬぞわが仲間に……」

なのは「やつだよ。はやてちやん。戀になつて小説が余計に悪くな  
るよ」

大地「おい、お前らのほうがひどいんじゃないか・・・・・大丈夫なのか?作者・・・・」

「一人『全然、大丈夫だよ（や）』

大地・フェイト『（頑張れ、作者。もつといこ小説書けるようにな  
つたらきっと一人の態度も変わるから……）』

スバル「なのはさーん！…」

なのは「あつ、スバル達も来たんだ」

ティアナ「はい。というかさつき、泣きながら走つて行く作者を見  
かけたんですけど、なにがあつたんですか？」

はやて「いや、ちょっと弄つただけや。なあ、なのはちゃん、フェ  
イトちゃん」

なのは「うん

フェイト「そ、そうだね……」

ティアナ「そ、そつなんですか……」

シグナム「主はやて」

はやて「あ、シグナム達も呼ばれとつたんか」

ヴィータ「うん、あ、そついえば途中、作者が泣きながら走つてう  
るをかつたからボ」して連れてきた

エリオ「うわー？」

キャロ「だ、大丈夫ですか！？」

ざわ「だ、大丈夫だ。ありがとう。心配してくれるのエリオとキャロだけだよ・・・・・ガク」

フェイト「ざわ！？」

大地「・・・本当に大丈夫、なのか？」

二人『大丈夫、大丈夫』

大地・フェイト・エリオ・キャロ『（絶対、大丈夫じゃない・・・・）』

大地「大体二人共、作者に恨みでもあるのか？」

二人『ある』

エリオ「即答・・・」

大地「どんなのだ？」

はやて「だつて出番少ないやんか！！」

大地「それならフェイトだつて同じくらいだぞ・・・・・なのはは？」

なのは「はやてちゃんやシグナムさんとばかりいいかんじになつて私はヒロインなのに・・・・・ブツブツ」

スバル「いろいろあるんですね・・・・」

大地「まあ、いいや。とにかくこれからもこの小説を・・・・・

全員『よろしいお願ひします！－－』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5183m/>

魔法少女リリカルなのは～白き光の魔導士～

2010年10月21日00時55分発行